

# 和服寸法設定の推移について (第2報)

高月智志子

On the change of the establishment of measurement of the  
Japanese clothes (2)

Chishiko TAKATSUKI

In this paper the author has made a study on the historical change of Japanese until after the World War II to the present. It goes without saying that there is a long history in the measurement of Japanese clothes. However, in order to make Japanese clothes easier to wear, the author has discovered in this study that for the purpose of the establishment of measurement, scientific measurement of bodily figures has to be conducted, and also various factors at the time of wearing has to be taken into consideration.

## 序

和服裁縫の伝承方法が、古くは口伝による秘伝として受け継がれてきたため、その寸法設定方法は詳かではないが、現在の割出し法の原流ともいえるものに相応裁という方法が、元禄時代既に行なわれていた。この方法は、身丈に或係数を掛けることにより必要寸法を算出する方法である。

しかし、それ以後のものでは、この種の手法は全く見る事が出来ず、江戸時代の主流をなしていたと思われるものは、布丈、布巾による設定方法で、上原素白の「裁縫早手引」(1830年)によると、「今絹布巾尺、新渡、古渡の相違ありて、先事既任不合時によって云々」と述べている、また、このことは、「裁物早指南」—著者不詳—(1850年)「裁物早学問」—著者不詳—(1851年)には、「反物・丈2丈7尺8寸ある時は、2丈7尺5寸のつもりにて裁つべし、必ず其丈一配に裁つべからず」と述べていることからあきらかである。

この手法は、明治、大正まで散見でき、この流れを汲むものに、久保田梁山、篠田監子、吉田調子等がいる。

しかし、この方法は、現在全く用いられていない。

江戸後期より、明治初期にかけて、着物の着装方法も徐々に変わり、それと共に、着装による寸法設定方法がみられるようになった。この手法には、高橋貴四郎、尾崎芳太郎、神谷ユキヘ等がいる。これは、着物を着てみて、より美しく見えるように、その寸法を加減するという方法で、現在の標準寸法をもとに、これを加減し、体格に合わせるという、寸法設定方法の原流をなすもので、今日もなお一般に最も多くの人々に受け継がれている。

この手法から発展したものが、普通寸法である。

これは、従来の経験により、生活の中で、積重ねてきた寸法を、普通寸法として用いたもので解剖学的根拠はなかったものである。

しかし、この普通寸法を、一定の目安として、その寸法を増減することにより、個人の体型に合わせようとするものに、中尾宗七、錦織竹香、岩瀬松子、大正時代では、吉田房子、田村こう、小岩井規太郎、塩田真三、喜多見さき子等がいる。昭和初期では、石田はる子、吉村千鶴、中沢か寿め、原田恵助等がこの流れを汲むものである。

一方、この手法と平行して、明治から大正に移り、洋服が次第に一般化して来るようになってからは、洋裁技術の影響を受け、採寸、及び割出しによる、寸法設定方法が次第にその主流をなすようになってきた。

初期のものでは、割出しのための割出し、というようなものもあったが、普通寸法による、寸法設定の手法と平行して、この手法を用いた人に、明治後期では、錦織竹香、喜多見佐喜子、渡辺きよ子、武田太郎吉等がおり、大正、昭和初期では、志摩野司、塩原千代子、小林れい、丸山ちよ、木下竹次、米沢光、石田はる、岡本すみ子等がいる。この方法は著者により多少の相異はあるが、大体、身丈、着丈、腰廻り、頸廻り、裾丈を採寸し、割出す方法で、今日における和裁研究者の主流をなすものの原流ともいえよう。

第二次世界大戦後、我が国の衣生活の中心が、和服から洋服に移行し、現在の若い人達の中には、物心ついた頃から、一度も和服を着たことがない、という人すら現われる状況である。

このような世相の中にあって、和服を美しく着こなすためには、寸法が、体格に合って、均衡がとれているということが、重要な要素であることはいうまでもないが、着装した場合の、生活動作を考え、動作がしやすく、また、動作によって着くずれすることのない、寸法設定をしなければならぬ。

そこで、本論文では第二次世界大戦後から今日にいたる寸法設定の推移を調べ、問題点を明らかにしていく。

## 1 普通寸法による寸法設定

和服の特徴は、身丈、身巾ともに、多くのゆりみをもたせて製作されているため、多少の寸法の加減は、着装の仕方によって、個人の体格に合せられるところにある。それが和服のよさでもあり、また、寸法設定の困難さにもなるのである。

成田順、石原アイは、その著「新時代の和裁」<sup>38)</sup>の中で「和服はもともとゆったりとした形に仕立て、着装の折、いわゆる着つけによって、体につけるのであるから、日本人の普通の体格ぐらいの人なら、誰でも使用出来る特徴がある。このため身についた着やすい和服を研究する必要がないように考えているのが普通である」と一般大衆の寸法に対する考え方を指摘している。

この手法の人には、大妻コタカ、大妻女子大学被服工作研究室代表者 安東テイ、上田柳子、神谷い代子・梶山藤子・橋本貴美子、中野みちを、安田盈子、大塚末子、石崎忠司等がいる。

この手法の代表的なものを上げると、石崎忠司は、「きものハンドブック」<sup>39)</sup>の中で、「仕立ての寸法では、一応基準となるものに標準寸法があります。ふつう寸法とか並寸ともいって、一般的な体型の人に合わせた寸法です。ただ人には各々からだつきのくせがありますし、着つけの好みも違いますから、少しづつ自分に合うように、寸法を加減したほうが、きれいに仕立てあがります。寸法の加減は採寸による方法もありますが、いちばん適切なのは、実際にきものを着てみて、これより裾を1cm出すとか、衿下寸法を2cm短くというように割出すやり方でしょう」と述べている。

また、大妻コタカは、その著「図解説明初歩より奥義まで和裁講座」<sup>39)</sup>の中で、「標準寸法をつぎのような方法で、適当に加減して自分自身の体つきに合う寸法を割り出しましょう」と述べ、その

方法として、

#### 1. 身丈の割り出し方と衿寸法

身丈の割り出し方は、着丈にお端折り分25cm～30cmを加えたものが最も着よいものです。衿はよほど衿丈の長い人でも、袖巾は普通寸法にして、肩幅で加減をしたほうが、恰好がよく見えます。もっとも特別に衿丈の長い人や短い人は、肩幅と袖幅とを同寸に出したり、また狭くしたりして、見た眼に形よくうつように工夫をします。

#### 2. 衿下寸法のきめ方

衿下寸法はその人の身長によって決めます、理想的な寸法は腰紐から衿先が4cmぐらい下に出る程度が最もよい形で、着た恰好もよく、着くずれもありません。

#### 3. 剣先の位置は、帯の上から剣先が少しぐらい見えませんと着物の恰好がつかないでみっともないから年の若い人、また反対にお年寄り人で、胸の張りの少ない人や、衿を首に巻きつけるようにひきつめて着る人は衿下がり寸法をすくなめにします。

#### 4. 剣先と衿下がりの位置

掛衿は、剣先から4cm～6cmぐらい下った所まで付いた方が美しく見えます。そして掛衿の下部は、帯のすぐ上に見えるのが適当で、姿もすっきりして見えます。その他、身幅なども体格に合わせて適当に加減し、美しく仕立てたいものです。と掲げている。

このように、個人の体格の異なることを認識した上で、標準寸法の着物を着て見て、個人の体型に合わせるべく、寸法の増減をはかるもので、今日もなお多くの人達の間で用いられている手法である。

## 2 採寸及び割出しによる寸法設定

元禄時代（1690年）すでに「裁物秘伝抄」に相応裁という、寸法設定方法があったが、その後、明治に至るまで、この種の割出し法を用いた著書は見当たらない。

明治時代後期から大正時代に入ると、洋裁の採寸技術の影響を受け、和服の構成が平面的であっても、個人の体型に合わせるには、やはり、立体的採寸によらなければならない、という考えから、多くの人達が、この採寸による割出し方法について、研究するようになってきた。「裁縫精義」<sup>4)</sup>にも割出しについて、次のように述べている。「和服は古来永く着用して来たもので、その仕立上げ寸法にも標準寸法があってそれによって多く仕立てられるのでありますが、もとより衣服各部の寸法は、その着る人の体格と着付け方によって定めらるべきもので、その適不適は着用者の容姿及び着心地の上に多大の影響をおよぼすものであります。故に便利な標準寸法を利用するも宜しいが、更に一步進んでよくその着用者と着用の目的とを熟知して、割出し法によって合理的に之を研究し吟味して正しい寸法を得るようにならなければなりません」と割出しの重要性を強張している。

第二次世界大戦後、我が国の衣生活の中心が、和服から洋服に移行して、ますますその技術の影響を受け、今日では、和服研究者の寸法設定の主流をなしているといえる。

この手法をとっている人に石田はる、米沢光、中村ヨシ、松井和哥、吉村八重野、堀越すみ、山本らく、波多江穂野、堀内コノブ、草間芳子、吉田花美、柴田志げゑ、岩松マス、成田順、石原アイ、滝沢ヒロ子、上田美枝等がいる。これらの人々の中でも、とくに代表的なもので、今日もなお、多くの影響を及ぼしていると思われる人々の手法について概述する。

### 1. 松井和哥の方法

松井は、その著「和裁図鑑」<sup>9)</sup>の中で、「和服は洋服に比べて割合に寸法が融通できますが、体格にあった寸法に仕立てることがたいせつです。標準寸法は、ふつうの体格の人はこの寸法で合いますが、たいへん肥った人、やせた人、特に背の高い人や低い人は、体格に合うように寸法を定めなければなりません」と、体格、体型の違いにより、その寸法の異なる事を指摘し、採寸および寸法設定を、次のように述べている。

- (1) 着丈の計り方：着丈を計るには肩山（衿付のきわで計る）からくるぶしの下までテープを下げて計ります。
- (2) 身丈の定め方：身丈は着丈に、おはしりの分と裾ぐけ代として 25cm 内外加えます。
- (3) ゆき丈：身長の高い人はゆき丈が長く、低い人は短いのがふつうです。ゆき丈を計るには、手を水平にのばして、背の中央から手首の関節の中央まで計ります。
- (4) くり越：くり越はふつう 2~3cm ですが、肥った人はくり越を多くして 4cm くらいにします。背の丸い人は自然に抜衣紋になりますから、くり越を少なくするか、または全然つけないで仕立てます。
- (5) 後幅の定め方：後幅は腰まわりの一番太い位置を計り、腰まわりの  $\frac{1}{4}$  に 5cm 加えます。
- (6) 前幅の定め方：後幅より 5cm せまくします。
- (7) 衿下の定め方：腰紐の位置は、腰骨から 5cm 内外上にしめるのがふつうです。衿下は、腰紐から 8cm 内外下った位置から裾まで計ります。

この手法は、現在、最も多くの人達に用いられている方法である。

### 2. 吉田花美の方法

吉田は、「和裁に関する諸問題」<sup>12)</sup>で和服寸法について次のように述べている。

明治、大正、昭和の和裁書25冊について標準寸法を調査し、その寸法のほとんど変動のみうけられないことを報告しており、一方、明治33年から昭和31年までの成年男女の体格の推移を調べ、女子の身長は 8.2cm、胸囲は 3.2cm の増加がみられることも併せて報告しており「和服寸法もこれに伴って変化しなければ正しい着装は望めない」と指摘している。更に「誰もが、直ちに自分の体格に基づいて適正な寸法を見出すことができる基準を決めたい」とその抱負を述べ、寸法の決め方については、

- |          |                           |            |                        |
|----------|---------------------------|------------|------------------------|
| (1) 袖 丈  | 身長× $\frac{1}{2}$ ぐらい     | (9) 身八つ口止り | 背丈に同じ                  |
| (2) 袖 口  | 掌回り× $\frac{1}{2}$ +10ぐらい | (10) すそ総巾  | 腰囲×1.5弱                |
| (3) 袖 付  | 腕付根回り× $\frac{1}{2}$ +2~6 | (11) 後 巾   | 腰囲× $\frac{1}{4}$ +6   |
| (4) 袖 巾  | (ゆき+1)× $\frac{1}{2}$     | (12) 前 巾   | 腰囲× $\frac{1}{4}$      |
| (5) 身 丈  | 着丈+23~25(身長と同寸)           | (13) おくみ巾  | 並巾× $\frac{1}{2}$ いっぱい |
| (6) くりこし | 頸椎~衿付~衿付縫代                | (14) おくみ下り | 乳下り-2~3                |
| (7) ゆ き  | 頸椎~手首                     | (15) 衿 下   | 腰ひも高さ-11~12            |
| (8) 衿肩明  | 頸囲× $\frac{1}{2}$ +2.5    | (16) 合づま巾  | おくみ巾-2                 |

と、記しており「和服に関する寸法は、体型を基にすることは勿論、着装の仕方や、社会の動きなどによって決められるべきである」と述べ、今後の研究の方向を示唆している。

### 3. 岩松マスの方法

岩松は、「新しい寸法による図解式和服裁縫前編」<sup>10)</sup>で、その割出し方を次のように掲げている。



のがよい。近代女性の身長は個人的に特に増加しているのがあるから注意を要する。

- (6) 袖丈：用途により，流行により定めることが第一で，それに体格・年齢を加味することが望ましい。
- (7) 袖つけ：腕つけ根廻りをはかり，それに5~7cmのゆるみを入れるのが洋服の普通の袖つけ寸法であるが，和服の時にはこれを2分した寸法より，少くならないように注意して定める。
- (8) 身幅（後巾・前幅・おくみ幅）：仮定腰囲寸法92cm（下着を着た上から測定する）はじめに脇の縫い目は，身体の測面中央より少し（5~6cm）前にまわった位置に定める。次に脇の縫い目と，衿下線が，着用した時に一致するように考えると，次のような寸法が得られる。

A 前の中央      A' 後の中央      B 側面の中央  
C 脇縫の位置      D おくみつけの位置

$$92\text{cm}(\text{腰囲}) \times \frac{1}{4} + 5\text{cm} = 28\text{cm}(\text{後幅})$$

$$92\text{cm} - 28\text{cm} \times 2 = 36\text{cm}(\text{前幅とおくみ幅})$$

$$36\text{cm} - 22\text{cm}(\text{前幅}) = 14\text{cm}(\text{おくみ幅})$$

裾においての前幅・おくみ幅は，これより1cmほど広くなるのが普通である。

- (9) 衿肩明き：頸囲をはかり，その $\frac{1}{6}$ を横に取ると，洋服の横のあき寸法になる。洋服形式のものは，これを基本として，衿の形や衿ぐりの大きさによって，大きさをかえてゆくが，和服にも同じ考え方を進めて，3cmくらい大きくあけるとよい。

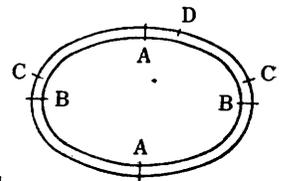


図2 成田・石原原図

と述べている。このように，成田・石原は，寸法設定に，洋裁の採寸方法をたくみに導入している。

### 3 黄金比による寸法設定

この手法は，着装による寸法設定方法の流れを汲むもので，和服を美しく着こなすためには，寸法が体格に合っ，均衡がとれているということがたいせつな要素であり，最も調和のとれた比例として，黄金分割が用いられている。

この手法は，土井幸代が提唱するもので，その著「和裁」<sup>44)</sup>で，次のように，その考えを述べている。「和服が体格に合っ均衡のとれている美しさを見出すよりどころとして，黄金分割を用いて検討するのも一方法であろうと考えた。そのわけは，古代ギリシアの昔から，最も調和のとれた比例として，黄金分割が用いられているからであり，和服は直線と平面で構成されているからである。

さらに長年日本人の人体計測を実施し，そのプロポーションを検討してみると，人体には黄金比が成りたつ箇所がかなりあることがわかったからである。

また，一般的に親しまれている比例として頭身指数がある。これは身長を全頭高で割ったものであるが，ただ割ればよいというのではなく，頭高の分割線の位置がどこを区切っていることが美しいかということである。

とくに和服は着装すると，帯，お端折り，羽織たけ，袖たけなど，直線で横に区切られる部分があるため，両者を検討の根拠として寸法を考察してよいと考えるが，人体は複雑な曲面から成りた

高月：和服寸法設定の推移について（第2報）

っているため、算出した数値は絶対的なものでなく、美を表現するよりどころであるため、これを斟酌する」と述べている。

寸法設定について

- (1) 着たけ：第七頸椎からくぶしまで測定するのであるが、測定しにくいので床までを測定して5cm減ずるとよい。
- (2) 衿たけ：従来の測定方法として、上腕を側方水平に上げて手くびのくるぶし（尺骨頭の中点）を計測して衿たけとしているが、これまでに検討したところでは、上腕側方水平位(a)と、上腕を下垂した状態(b)との寸法に6cmの差があることがわかった。したがって、上腕側方水平位ではかかった寸法を用いると、着装したときに衿たけが短くなる。それゆえ、上腕を45°ぐらいに上げた状態(c)ではかかることが妥当である。
- (3) 前上腸骨棘高：マルチン氏の身長計を用いて、床から腸骨棘までの直線距離をはかったものの。
- (4) 頸つけ根まわり：後ろは、第七頸椎から頸のつけ根にそって、前は鎖骨頭の上端を通してはかる。

表1 人体計測値（成人21～22才）（単位 cm）

項目	性別	男 子				女 子			
		$\bar{x}$	s	最 小	最 大	$\bar{x}$	s	最 小	最 大
身長		168.0	5.55	154.1	181.2	155.6	4.66	142.9	163.6
頸椎高		143.8	5.34	129.6	155.4	130.8	4.44	118.6	139.4
右肩先高		136.0	4.86	124.8	148.4	125.3	4.07	113.5	132.6
右乳頭高		120.3	5.05	101.7	131.6	110.6	4.00	98.7	117.2
右前上腸骨棘高		90.2	3.62	80.9	100.0	84.0	3.82	72.2	91.1
右中指端高		63.5	3.43	56.3	72.1	58.6	3.02	52.8	64.0
後ろ胴高		97.8	3.88	91.2	108.1	94.9	3.58	83.8	103.4
右外果高		7.2	0.39	6.0	8.0	6.4	0.39	5.5	7.2
指極		169.1	6.28	151.6	183.4	155.1	5.62	145.1	166.1
腰部横径		31.1	1.65	26.9	35.3	31.1	1.50	27.0	34.8
全頭高		24.2	0.96	20.7	26.0	22.7	0.95	20.1	24.8
腰部囲		90.0	4.40	81.7	102.3	89.3	4.04	80.5	99.8
背肩高		43.9	2.42	39.0	49.5	38.9	1.97	33.5	43.6
掌囲		22.4	1.05	20.2	25.5	19.7	0.78	17.9	21.3
総たけ		144.8	5.50	131.3	158.7	132.6	4.52	119.8	141.6
頸つけ根囲		43.4	2.11	39.1	50.0	37.7	1.28	34.8	40.7
手長		19.8	1.19	16.7	22.7	17.8	0.94	15.3	20.4

備考  $\bar{x}$  は平均値, s は標準偏差をあらわす

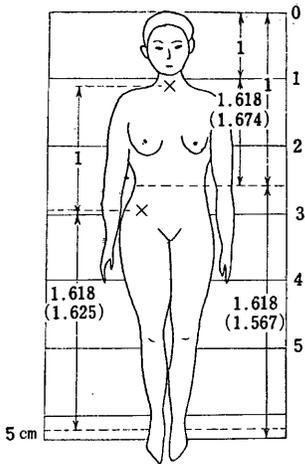


図3 寸法設定について (土井原図)

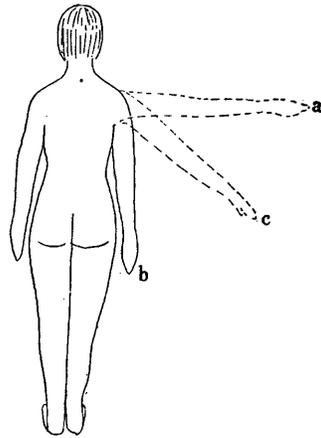


図4 衿たけのはかり方 (土井原図)

- (1) 袖たけ：着たけを黄金分割すると、ほぼ前腸骨棘点で区切られて上部が1，下部が1.618またはこれに近似の値となる。したがって図5のc, bのように1の値を袖たけとした。また袖巾と袖たけの関係をみると図5のc, dのようになり、黄金分割とほぼ近似となることからこのような考察をもとに袖たけを決定してよいと思う。

次に、袖たけを長くするときの根拠は、頭高線で区切る寸法を考慮してよい。

人体の頭高線の区切る位置が美的表現に関係するので、袖の長い場合もこれをよりどころとして考慮するのも一方法である。たとえば、全頭高×5 - (身長-肩先高) = 袖たけ、このような算出により、表1の計測寸法にあてはめると、平均値で袖たけ83cmとなる。または、頭身指数の大きい人あるいは、大振袖にしたいときは、全頭高×6 - (身長-肩先高)として用いてもよいのである。これを基本に±ⅷ寸とすれば、バランスのとれた寸法が設定できる。

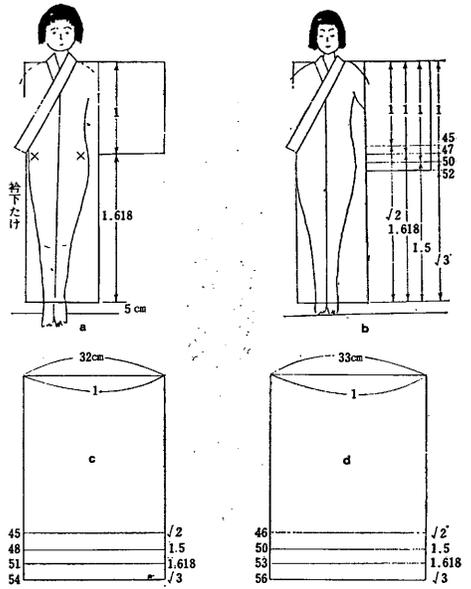


図5 袖丈の決め方について (土井原図)

- (2) 身たけ：着たけにお端折り分を加えた寸法であるが、お端折り分としては、25~30cm ぐらいを必要とする。

表1の計測値で計算すると、身長-頸椎高=24.8cm (平均値)となるため、身長を身たけとしてよい。しかし、この量は腰ひもを締める位置によって異なるので腰ひもを腸骨稜の上に締めるくせのある人は、3~4cm 多くすると適当なお端折りの量が決まる。

- (3) 衿下：前上腸棘高から外果端高を引いた寸法が適当で、黄金分割したとき1.618の寸法も近

似となる。この寸法は、身長約の約 $\frac{1}{2}$ となる。

- (4) 身巾：図6に示すように、腸骨稜の最外側点にわき縫い目を決定する。この両外側点間を体表にそって測定すると、前の腰巾が決定することができる。

(腰まわり+ゆとり (4cm) - 前の腰巾)  $\div$  2 = 後幅寸法

前の腰幅を測定した結果、次のように決定してよいようである。

腰まわり寸法	前の腰巾
86cm	36cm
88cm	37cm
90~ 92cm	38cm
94~ 96cm	39cm
98~100cm	42cm
100cm	42cm

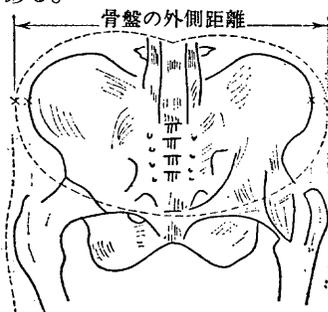


図6 身幅について（土井原図）

とくに腰囲わりの増大は、でん部と腹部の脂肪沈着によるのであるが、肥満体は腹部のほうが増大す

るため、前の腰巾が広がる。したがって、前の腰巾を広く仕立てることになるが、前身ごろには衽つけ縫い目があって、前幅を広くしてもさほど広く感じない。しかし、後ろ幅を広くするときは、かえってしまりなく見え、着つけたときのかっこうはよくない結果となる。

- (5) 衽肩あき：頸つけ根まわり  $\times \frac{1}{4}$  = 裁ち切り衽肩あき
- (6) 衽下がり：頸椎高 - 乳頭高 + 2~3cm（計測は直線距離であるため、身体のかぶり分を加える）
- (7) 衽たけと袖巾・肩巾の関係：衽たけ  $\times \frac{1}{2}$  + 1cm を袖巾としてよいが、最近では、身長が伸びているわりに、身幅を必要としないため、後ろ巾と肩巾に寸法の開きが大きく、縫い込みの落ちつきが悪くなる。このようなときは既成概念にとらわれず、布幅いっぱいまで袖巾を広くする。
- (8) 抱き巾：乳頭の位置で、左右両体側中央までを実測し、その $\frac{1}{2}$ を衽下がりの位置でとるとよい。
- (9) 袖口：掌まわりを最小袖口寸法として、これに2~3cmを加える。

以上のように、土井はその方法を述べている。

## 4 結 論

和服寸法設定は、土井の指摘するように、裁縫の伝承内容が、もっぱら裁ち縫いという技術が優先し、これが衣服を形づくる基本と考えられ、長い間の生活習慣となるまでに、その生活の中に浸透したため、寸法設定の根拠も薄弱で、生活のなかで積み重ね、引き継がれた標準寸法に依存し、なんらの抵抗もなくきたのである。経験を通して樹立されたきた寸法にもそれなりの妥当性は見出されるが、吉田の研究で「明治33年より昭和31年までの56年間に、男子は身長4cm、胸囲3.7cm。女子は身長8.2cm、胸囲3.2cmの増加があり、特に女子の身長増加は著しい」と指摘しているように、最近では日本人の体格も非常に向上している、特に女性の体位向上は目をみはるものがある。このようななかであって、標準寸法は、明治から大正・昭和戦前を経て戦後に至っても、なお寸法に変化のないことに諸問題が存在する。

その理由の一つには、和服の形態そのものが、単純で、平面的なものであり、丈、巾ともに多く

のゆるみが入られているため、多少の寸法の加減は、着装により融通がつくところから、いまなお、多くの人達が、標準寸法に依存する所以があるものと考えられる。

しかし、戦後、衣生活の中心が和服から洋服に移行して、ますます洋裁技術の導入がこころみられ、成田・石原の手法に見られるように、立体的採寸が行なわれるようになってきている。

また、着装美の要素として、寸法が、体格に合っていることは勿論であるが、均衡がとれているということが、大切な要素であって、このことから土井は、黄金分割による寸法設定を提唱している。

このように、多くの先人によって、こころみられてきた寸法設定も「被服と人体」の中で指摘しているように、身丈、そで丈、ゆき、衿下、全体の身巾の5ヶ所以外の寸法は、身体を測ってきめにくい部分であるとともに、従来から使われている標準寸法が、大体合う寸法であるので、身体を計る決定的な箇所が見出されるまでは、この標準寸法を用いたほうが無難であると考えられる。と述べていることから、未だ寸法設定の基本的基準は確立されてはいない。

今後の和服寸法は、人間工学的視点から、体型の立体的測定は勿論のこと、生活行動、着装上の要因も充分考慮した上で設定されなければならない。

終りにのぞみ、本論文の校閲を賜った松井和哥本学教授、島田俊秀助教授に対し深く感謝致します。

#### 引用・参考文献

- 1) 東京女子高等師範学校石田はる：新修和服裁縫要訣 三集社出版部 (1946)
- 2) 成田順、藤田とら、安東テイ：裁縫 I 実教出版 K. K. (1951)
- 3) 岩松マス：図解式和服裁縫全集前篇 雄鶏社 (1952)
- 4) 奈良女子高等師範学校裁縫研究会代表者米沢光：裁縫精義 東洋図書 (1953)
- 5) 石田はる：和服裁縫独習書 主婦の友社 (1953)
- 6) 岩松マス：図解式和服裁縫全集 雄鶏社 (1954)
- 7) 文部省：高等学校家庭科被服指導書 (上) 実教出版 K. K. (1954)
- 8) 松井和哥：和裁図鑑 暁図書 (1955)
- 9) 著者代表担当者岩松マス、沼畑金四郎、氏家寿子：新家庭科生活全書被服 ひまわり社 (1956)
- 10) 大妻女子大学被服工作研究室代表安東テイ：被服工作 コロナ社 (1956)
- 11) 中村ヨシ：これからの和服裁縫 至誠堂 (1958)
- 12) 吉田花美：和裁に関する諸問題 家政学雑誌 第10巻、第4号 (1959)
- 13) 上田柳子：図解和服裁縫の仕方 金図社 (1959)
- 14) 吉田花美：新しい和裁教室 (上) 新元社 (1959)
- 15) 石田はる：和服裁縫 主婦の友社 (1961)
- 16) 吉村八重野：図解和裁学習書 家政教育社 (1961)
- 17) 大妻女子大学被服工作研究室代表者安東テイ：被服工作 コロナ社 (1961)
- 18) 岩松マス：図解式和服裁縫全集 (前) 雄鶏社 (1961)
- 19) 岩松マス：和裁全書 (1961)
- 20) 上田美枝：新しい仕立方のきもの 主婦と生活社 (1961)
- 21) 山本らく、波多江穂野、堀内コノブ、草間芳子：新版和服裁縫全書 大日本図書 K. K. (1962)
- 22) 岩松マス：図解式和裁全書 雄鶏社 (1962)
- 23) 大妻女子大学学長大妻コタカ：図解説明初歩より奥義まで和裁講座 日本女子教育会 (1963)
- 24) 波多江穂野：最近和裁全書 柴田書店 (1963)
- 25) 吉田花美：あたらしい和裁 ひかりのくに昭和出版 K. K. (1963)
- 26) 米沢光：図解和服の裁ち方自由自在 (1963)
- 27) 堀越すみ、大塚末子、村井八寿子、三田村環：みんなの和裁 家の光協会 (1964)
- 28) 大塚末子：きもの全書 婦人画報社 (1966)
- 29) 吉村八重野：図解和裁学習書 家政教育社 (1967)

高月：和服寸法設定の推移について（第2報）

- 30) 主婦と生活：和裁独習書 主婦と生活社(1967)
- 31) 梶山藤子，橋本貴美子，神谷い代子，中野みち  
安田盃子：被服構成 広川書店 (1967)
- 32) 藤田とら：和服裁縫 光文社 (1967)
- 33) 成田順，石原アイ：新時代の和裁 宇野書店  
(1967)
- 34) 清水とき：清水とき和裁全書
- 35) 山本らく：新訂和裁提要 刀江書院 (1967)
- 36) 滝沢ヒロ子：新しい和裁全書 永岡書店(1967)
- 37) 柴田志げゑ：和服裁縫 (全) 建帛社 (1968)
- 38) 石崎忠司：きものハンドブック 文化服装学院  
出版局 (1968)
- 39) 岩松マス：和装と和裁百科 主婦の友社(1968)
- 40) 岩松マス：新しい寸法による図解式和服裁縫前  
編 (1968)
- 41) 大塚末子：改訂きもの作り方全書 (1968)
- 42) 大塚末子：新しい和裁 同文書院 (1968)
- 43) 藤田とら：改訂新版和服裁縫 光文社 (1969)
- 44) 土井幸代：和裁 東京同文書院 (1969)
- 45) 清水とき：きもの全科 家の光協会 (1970)
- 46) 石田はる：改訂版和服裁縫 主婦の友社(1970)
- 47) 日本人間工学会衣服部会：人間と技術社(1970)
- 48) 水梨サワ子：被服構成学 朝倉書店 (1971)
- 49) 日本人間工学会関西支部被服部会 被服人間工  
学 (1971)
- 50) 吉村八重野：図解和裁学習書 家政教育社  
(1965)
- 51) 高月智志子：和服寸法設定の推移について(1)  
東京家政大学紀要第12集 (1971)